

③ 担癌症例などに用いる補中益気湯に関する緩和ケアチーム医師の理解度について

独立行政法人 国立病院機構 神戸医療センター 泌尿器科¹⁾
センプククリニック²⁾

大岡 均至¹⁾、千福 貞博²⁾

【目的】

担癌症例などに汎用される補中益気湯(TJ41)について、処方に当たり知っておくべき知識の理解度につき考察する。

【方法】

東洋医学的知識と西洋医学的な知見に関して一覧を作成し、TJ41を処方する日本緩和医療学会医師96名にその認知度につき確認した。検討項目は、和漢的側面として、1)参耆剤、2)四君子湯ユニットを含む、3)柴胡・升麻による升提作用、4)升陽挙陷・甘温除熱、5)適応病態(病期)の理解、6)他の漢方との併用処方、7)六君子湯との関連、8)小柴胡湯との関連。西洋医学的側面では、9)作用機序(体液性免疫、NK活性、マクロファージ、サイトカインへの影響、精巢・精子への影響等)、10)論文報告でのTJ41投与が有効な疾患や病態、11)有害事象とその対策等、である。

【結果】

上記の項目で、2),3),4),5),6),7),8)に関する理解は不良であり(6/96)、1),9),10),11)に関してはある程度理解できていた(89/96)。

【考察】

今回の検討には、漢方の理解が西洋医学的側面に偏っており、和漢的側面からの理解が不十分である傾向が認められた。好ましい緩和ケアを実践するためには、1)西洋医学と和漢診療学の両者に十分精通すること、2)方剤を適切に処方し、その効果を判定し、方剤変更を適正に行うこと、などが肝要である。日本東洋医学会専門医でなくとも、漢方の最低限の知識は必要であり、漢方の和漢的側面に関する更なる理解が肝要であると思われた。